

誰もが1度は聞いたことがある、どこか懐かしさを感じさせる戦時歌謡の唄い出しである。♪ラバウル海軍航空隊♪と並んで、南方を知る戦争世代にとっては、今も戦時下のラバウルに郷愁を憶えるナツメロである。南洋群島・ソロモン諸島のニューブリテン島ラバウル軍港は、戦時中日本海軍の橋頭保として海軍軍令部南方作戦の重要な戦略拠点だった。

戦後30年を経過した1975年、ある調査の依頼を受けソロモン諸島のガダルカナル、ブーゲンビル、パプア・ニューギニアを訪れた帰路、「こんにちは ラバウルさん」とばかりに憧れのラバウルへ立ち寄ってみた。往時の帝国海軍水兵さんの望郷の気持ちに少しでも触れてみたいと思ったのだ。早速海底に沈んだ旧日本海軍艦艇内へ素潜りで入り込んでみて、心の中に戦没者への慰霊の気持ちこそ沸いたが、全鑑どころかまわす貝殻が付着した沈没艦には、最早戦争の爪痕は感じられず、リゾート・ビーチらしい美しい熱帯魚が奔放に回遊していた。椰子の実繁る陸上にも最早日本海軍や戦争の残像は感じられなかった。

その夕べ気晴らしに港町の居酒屋風食堂でひとりビール

に酔いしれていた時だった。突然ガヤガヤと騒がしく日本語の話し声が聞こえて来た。すると数人の日焼けした日本人がなだれ込んで来た。彼らはテーブルに着くや、アルコールとともにいくつもの大どんぶりにふんだんに盛った生野菜を注文して、全員大きく口を開けて生野菜をムシャムシャかぶりつき出した。その光景があまりにも異様に見えたので、しばらくしてその中のひとりにそっと尋ねてみた。

話によると彼らは、日本から赤道を超えて遠洋漁業に出るからもう3か月以上も青物野菜を食べていないので、身体が無性に生野菜を欲しがり、ラバウルに上陸したこの機会に、ビタミンC栄養分を腹いっぱい詰め込みたいと野菜を食べに来たという話だった。今は魚なんて食べる気もしないといい、私のテーブルの小皿の上の刺身の切れ端を見て、「俺らの船に来れば、魚なんかいくらでもやるよ」とも言われた。実際食べ物の醍醐味とは、いかに食べたいものを、食べた時に存分に食べられるかということではないかと改めて思ったものである。

あの日以来、♪しばし別れの♪ラバウルへ「また来る日」は、未だやって来ない。